

宮沢賢治「よだかの星」①

名前	

○つぎの文章を読んで問題に答えましょう。

よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ、味噌をつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。

足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまうという
工合でした。

たとえば、ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思っていましたので、夕方など、よだかにあうと、さもさもいやそうに、しんねりと目をつぶりながら、首をそっ方へ向けるのです。もっとちいさなおしゃべりの鳥などは、いつでもよだかのまっこうから悪口をしました。

「へん。又出て来たね。まあ、あのさまをくらん。ほんとうに、鳥の仲間のつららよ。」

「ね、まあ、あのくちのおおきいことさ。きっと、かえるの親類か何かなんだよ。」

こんな調子です。おお、よだかでないただのたかならば、こんな生はんかのちいさい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色を変えて、からだをちぢめて、木の葉のかげにでもかくれたでしょう。ところが夜だかは、

ほんとうは鷹たかの兄弟でも親類でもありませんでした。かえって、よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石のような蜂はちすずめの兄さんでした。蜂はちすずめは花の蜜みつをたべ、かわせみはお魚を食べ、夜だかは羽虫はむしをとってたべるのでした。それによだかには、するどい爪つめもするどいくちばしもあります。ですから、どんなに弱い鳥でも、よだかをこわがる筈はずはなかったのです。

それなら、たかという名のついたことは不思議ふしぎなようですが、これは、一つはよだかのはねが無暗むやみに強くて、風を切って翔かけるときなどは、まるで鷹たかのように見えたことと、も一つはなきごえがするどくて、やはりどこか鷹たかに似にていた為ためです。もちろん、鷹たかは、これをひじょうに気にかけて、いやがっていました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩かたをいからせて、早く名前をあらためろ、名前をあらためろと、いうのでした。

問題

よだかは、どうして「たか」という名がついたのでしょうか。その二つの理由をそれぞれ本文から書きぬきましょう。

①

②